

この頃、思いつく

八世宗家

藤間 勘十郎



今年には藤間流創流三〇五年に当たります。私が金沢で勘十郎襲名を迎えたのが、ちょうど三百年目の年なので、私が八代目を継いでまだ五年、藤間流の歴史の一行にもなりません。舞踊家・振付師としての仕事は、皆様の御蔭をもちまして、一生懸命努めさせて頂いておりますが、昨今ほかの分野の仕事もさせて頂けるようになりました。

一つは脚本・構成。去年の京都顔見世公演で上演された「源氏物語」で初めて歌舞伎公演の構成という肩書きで携わる事が出来ました。

二つ目は演出。昨年三月中村芝雀さんの会演出の他、同じく昨年一月新橋演舞場より、本年四月御園座、八月新橋演舞場、十月博多座にて市川海老蔵さんと組ませて頂き、演出のお手伝いをさせて頂きます。

最後に作曲。二十歳の時より数多く作品を発表させて頂いておりますが、本年一月の松竹座での

坂田藤十郎師「春寿松万歳」では一部分を私が作詞・作曲をさせて頂き、念願でした歌舞伎公演での上演が叶いました。

祖父や母から受継いだ舞踊以外の仕事を手掛けさせて頂けることをとても嬉しく思っています。中でも作曲の仕事は【私だけ！】と思っておりますが、先日分家・世家眞ますみの叔母に「あなたのお祖父様も作曲をしたのよ。」と言われました。三味線の腕も確かな祖父、今歌舞伎でよく上演される『女伊達』も、廃れていた物を祖父が覚えていて、弾き語りでも長唄の人に教えた中村芝翫師から伺いました。

今の私はどれをとりましたが先人の足元にも及びません。しかし『いつか母や祖父に追いつき、追い越したい』という目標に向かって日々精進して参ります。その為にもまずはしっかりと舞踊家になる事を大切に、本年七月二日・国立能楽堂にて古典を基にした作品を発表する会を開催します。伝承と創意を胸に、今は亡き清元榮三郎師から笑顔で「何でも出来る事が決して良い事だと思っではいけない。」という言葉をおぼろげに忘れることなく、今年も頑張ります。

藤間三百五年の流れ

共立女子大学教授・演劇評論家

近藤 瑞男

今年には、藤間宗家が三百五年になる年だという事です。といいますのは、初世藤間勘兵衛が、弟の藤間勘左衛門とともに、故郷の武州入間郡川越領藤間村から江戸に来たのが宝永元年（一七〇四）で、これを区切りの年としたのだそうです。そこで今回は、藤間の流れについて記してみたいと思います。すでに藤間会・襲名舞踊会のプログラムに、国立音楽大学の客員教授でいらつしゃった竹内道敬先生がお書きになった「藤間勘十郎の代々」があり、たいへん詳しく藤間の歴史が述べられていますし、会報では六世宗家のお話を伺いながら、特に五世以降について記された記事もあります。ぜひそれらも読み返していただきたいと思えます。

勘十郎について述べる前に、まず、先にも述べた藤間の始祖である勘兵衛について触れておきましょう。

初世藤間勘兵衛は、江戸に来た後、日本橋通町十九文横丁に住み、踊りの師匠をしていたのですが、西川扇蔵の推挙によって、芝居小屋の振付しになったのだといわれています。この勘兵衛は宝暦三年（一七五三）一月、市村座の顔見世番付に名を見ることができ、翌年の顔見世の舞踊「風流妹背の柱建」は、この勘兵衛の振付です。それまでの振付師がおおかた役者出身であるのに対し、珍しいケースで、竹内先生は、「振付が職業として定着しはじめたことを物語っている」と書かれています。

二世勘兵衛は初世の実子といわれ、藤間兵蔵の名を名乗り、安永元年に二世を継いだものと考えられます。「二人腕久」「蜘蛛拍子舞」などを振付けました。

三世ははじめ魚仙という魚屋の奉公人だったということですが、その娘が二世勘兵衛の稽

古に通うお供をするうち、見覚えた力を認められ、二世勘兵衛の養女の婿になったと伝えられています。この三世は江戸三座の振付として活躍、藤間の最盛期を作った人物と称えられています。なおこの人物は養家を出た期間があり、寛政一〇年から二十一年間、藤間勘十郎を名乗っています。現藤間宗家では代数に入れてはいません。なお現藤間宗家が初代とする勘十郎は、この三世勘兵衛の養子になります。

その後、九世までこの勘兵衛の名は女性が継ぐこととなり、芝居関係からは離れてゆきます。

さて、初代の藤間勘十郎は、寛政八年（一七九六）の生まれで、大阪の振付師瀬山家の縁者と伝えられています。瀬山大助といったそうですが、やがて三世藤間勘兵衛の養子となり、藤間大助と名乗りました。振付のはじめは、文化九年（一八一二）一月、江戸、森田座の「恋巽奇掛合」（犬神）で、養父の藤間勘兵衛とともに名前が記されているといえます。これによればわずか一六歳の時になるので、いささか驚

名の高い人でした。

五世は四世の養女で藤間タツ。徳川の家臣田中家の娘で、六歳から踊りを習い、とくに当時名人と呼ばれた坂東三津江の教えを受け、やがて四世中村芝翫の世話で四世のもとに入りました。明治三十二年、勘十郎を継ぎました。五世は六代目尾上菊五郎の新作舞踊の振付けを受け持つことも多く、歌舞伎界とも関係を持っていました。

弟子に厳しい稽古をつけるのでも有名で、六代目菊五郎が舞台で踊っているのを見、幕が閉まった時にその幕をめくりあげ、稽古のし直しをすると叫んだという話が残されています。後のことですが、菊五郎劇団の十七代目市村羽左衛門は五世の話として、物差しでまたの間をかき回された、と語っています。

五世は踊を継ぐ子がいなかったため、大正四年に養子を迎えました。尾上菊治郎の部屋子（当時芙蓉）だった尾上梅雄、十五歳。後の六世宗家です。五世は女性でありながら、大師匠

かされます。その後、文政元年（一八）に上方に上っています。どうも養母との折合いがよくなかったようです。六年間、京坂の振付けをおこないますが、その間に養父勘兵衛が亡くなっています（文政四年一二月）。文政六年に江戸へ戻りましたが、一時、岩井大助を名乗っている。このようなことから藤間家との確執がうかがえます。しかし間もなく和解、藤間大助の名で振付をおこなうようになります。本来ならばここで四世藤間勘兵衛になるところなのでしようが、養母に遠慮、茅場町に別家し、養父の別名の藤間勘十郎を名乗ったのでした。振付師としての生活三十年、「正札附根元草摺」「六歌仙容彩」「年増」「供奴」など、振付けた曲は、知られているだけでも百曲をゆうに越すといわれます。

さて二世はやはり勘兵衛の跡継ぎと同じで、女性でした。そして三世、四世、五世と女性が勘十郎の名跡を継ぎましたが、町の師匠として踊りの道に生きたのです。中でも五世は名人の

として名声を博しましたが、昭和十年三月十日になくなりました。

六世は明治三十三年十月二十日生まれ。西暦では千九百年。洲崎の引き手茶屋松本の娘の子で、六歳の時、歌舞伎界に入り、子役として舞台上に立っていました。十五歳で藤間の養子になった梅雄は、六世は義母に仕えながら、踊りの師匠としての生活を始めます。朝八時頃から夜八時頃まで弟子に稽古をつける毎日です。もちろん家事も六世が引き受けていました。「母は口やかましく、むずかしい人でした。三人組んでいる踊りは、三人の振りをいっぺんに覚えなると怒るんです。でもそれで今、十人くらい並んで踊っていても全部の人が見えるようになったのですから、母のおかげだと思えます。」と六世は語っています。なお六世がはじめて振付けた曲は清元の「柏の若葉」で、藤間会の折に、適当な御祝儀舞踊がなかったために振りを作つたということです。

六世は、昭和初年、六代目菊五郎の推挙によ



日時 11月23日 日曜日
 場所 日本橋社会教育会館
 振付 藤間 勘十郎
 内容 苦舟四季彩より
 秋「姨捨」
 人数 一・二部合計 50人

勘十郎

今回で四季彩も三回目を迎え、次回の冬「雪の道行」を残すのみとなりました。今回の講習会の感想と次回に向けて、八世宗家に一言伺いました。

今回の「姨捨」は、祖父や母が手懸けた同名の作品をヒントに、「いかに少ない手順の中で踊りすぎずに役の心情を表すか」という事を一番に考え振付・講習致しました。皆様には今までの講習会にない難しい作品だったのではないかと思います。私達もこれらの難しい課題を先人から受け継ぎ、伝えていけるようにしていきたいと願っています。

今回の講習会も一・二部共に参加された方、遠方よりの方、毎回参加されている方と老若男女を問わず、一生懸命に講習されている姿に、私もとても心強くなり、また参加して下さる皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

次回は初めてのコミカルな舞踊「雪の道行」(一人立用)を致します。多くの皆様に講習会にてお逢い出来るのを楽しみにしています。

つて、歌舞伎の振付師として活動を始めます。当時は、十五代目市村羽左衛門、七代目坂東三津五郎、十三代目守田勘弥、七代目松本幸四郎など名人がきら星のように並んでいました。こうした名人に囲まれながら、振付師として成長してゆくのです。

「船弁慶」「羽の禿」「うかれ坊主」など新しい振付で菊五郎が踊った曲は、みな六世が手伝っています。なかでも昭和十二年の「藤娘」は、新感覚で画期的な曲となりました。それまでの「潮来」の代わりに岡鬼太郎に依頼して「藤音頭」を挿入、大当たりとなり、現在の歌舞伎でも人気曲になっています。六代目は、「演芸画報」の記事の中で、「岡さんの書かれた音頭の振りを藤間勘十郎が纏め、それを私が直しました。・・・勘十郎から望まれました此藤娘の権利を同家にやりました。」と述べています。

六世と六代目菊五郎とのかかわりの中で落とせないのが、六世の素踊りの姿です。六世は舞台に立つとき、つねに素踊りでした。「私は(越後獅子を)素踊りで、太鼓も付けません

でね。扇だけで打つ振りをしました。六代目さんがその評判を聞きまして、その日に歌舞伎座の楽屋に呼ばれて、お前はこれから素踊りでやれといわれました。はいと申しまして、それから素踊りです。」

このようにして六世の世界が誕生したのでした。「佐野源左衛門常世」「関寺小町」「井筒」「通円」などの傑作舞踊は戦後舞踊会の至宝でした。また歌舞伎でも戦後、毎月、新しい振付を行い、芸術院会員の栄を受けました。こうした伝統は七世宗家、八世宗家にも脈々と伝えられていくのです。

六世がはじめて振付をしたのが、「柏の若葉」でした。二十五歳ころ、藤間会での適当な祝儀曲がなかったために振付けたといわれています。大正十五年に五世が隠居、昭和二年十月に市村座で披露が行われ、それをきっかけに六代目尾上菊五郎が劇場の振付師に抜擢します。五世に恩を感じていた六代目の気持ちがかめられていたのだとおもわれます。